

八王子の未来のまちづくりへのエール

八王子市都市政策研究会議委員 市川 健寿

私が八王子市役所に入庁した 1971(昭和 46)年は、我が国全体が田中角栄内閣のもと日本列島改造論の真っ只中で、経済成長著しく民間景気がうなぎ登りの時代だった。当時、地方公務員の給料は民間企業の半分程度であり、特に民間企業で引く手あまたの技術職に公務員志望者は少なかった。本市においてもそんな時代背景の中、技術職の採用が困難な時期だったが、公共事業、特に下水道普及事業のための技術職の確保を急務としており、私も既に民間企業に就職していたが、個人的な事情もあって本市に入庁することとなった。下水道整備は、その頃「市内全域に下水道を普及させるには 100 年かかる」と言われていた大事業であったが、奇しくも私が定年退職を迎える平成 19 年度末をもって下水道普及率 100 パーセントを達成できたことは、9 年間下水道事業に携わった者として感慨深いものがある。



下水道事業：平成 19 年度で普及率 100%達成

入庁から 26 年間は、事業部門で道路・河川や橋梁整備などの公共施設建設事業に従事し、本市のインフラ整備に携わった。中でも、総工費約 140 億円の超大型プロジェクトである八王子駅北口地下駐車整備事業を担当し、最先端の技術を駆使した現場で仕事できたことは、貴重な思い出のひとつである。5 年間にわたる長期事業であり、様々な問題を乗り越えたうえで竣工を迎え、地元をはじめとする市民の皆さんに喜んでいただいたときには、それまでの苦労も忘れ、まさに技術者冥利に尽きる思いを味わった。今も多くの市民の皆さんにこの駐車場をご利用いただいております、中心市街地活性化の一翼を担っている施設であると自負している。

私自身、このとき 40 歳代半ば、体力と気力に満ちた一番充実していた時期で、がむしゃらに仕事に励み、夜間立会いも苦にならず、楽しく仕事をさせていただいた。今でも当時の仲間達と呑むと、その頃の苦労話に花が咲く。



八王子駅北口地下駐車場：本市過去最大級の土木工事



市役所生活後半の11年間は、計画立案部門から本市のまちづくりを見てきた。

186平方キロメートルという広大な市域を有する本市では、各地域の特性を活かしたまちづくりを有機的に結びつけて全体のまちづくりを進めることにより、市民をはじめとするまちを利用する人々が「愛着」や「満足」を感じることができる。私は常々、そんなまちづくりが重要だと考えてきた。

最近巷では、八王子が都市間競争において近隣都市の後塵を拝しているかのごとく言われているが、私は、決してそんなことはないと思っている。毎年実施している市政世論調査によれば、本市市民の定住意向は約90%であり、全国的に見ても、また、近隣他都市と比較しても、非常に高い数字となっている。まちづくりは、まず、そこに住む人に評価されるべきものであり、そういう意味でも、本市のこれまでのまちづくりは一定の成功を収めてきたと考えてよいのではないかと思う。

そして、なにより本市は、未来のまちづくりの可能性に溢れている。本年1月、1991(平成3)年の準備会設立から紆余曲折はあったものの、ついに八王子駅南口再開発事業が着工に漕ぎ着けた。新市民会館などの公共施設や商業施設、住宅などからなる再開発ビルの整備により、2010(平成22)年秋、JR八王子駅南口は大きく変貌する。これを契機に、今、新聞等で報道されている八王子医療刑務所の市外移転計画が実現した場合、その跡地利用をどうするか。2009(平成21)年度に移転が予定されている明神町の産業技術研究センター跡地、東京都南多摩西部建設所用地、八王子市保健所用地などを含む明神町・旭町一帯のまちづくり。中央道八王子インターチェンジ北の大規模都有地。首都圏中央連絡自動車道八王子西インターチェンジ周辺約170ヘクタールの物流拠点開発。ミシュラン三ツ星の観光地に相応しい高尾地域の観光まちづくりなど…。

まちづくりに係わる全ての関係者が侃々諤々の議論を交わし、知恵を出し合い、一致団結して“八王子らしい”まちづくりを進めることが肝要だ。とりわけ、市のまちづくり計画立案部門と事業部門の後輩職員には、市民への「責任」と未来への「夢」を胸に、自信と誇りを持って大いに頑張ってもらいたい。

これから他の都市では決して真似ることのできないまちづくりが進められると信じている。



八王子駅南口再開発ビル：八王子駅南口の新しい「顔」

(いちかわ けんじゅ・まちづくり計画部長)